

JICA ボランティア デイズ 千葉 創刊号 2004.3.25

会報の発刊にあたり 千葉県JICAシニアボラン ティアの会

会長 及川 淳一

陽春の候、会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

当会も昨年の七月に発足してから半年以上の時が過ぎました。この間、四十人の参加者が参集した第一回の定例会を開くことができましたし、浦安市の国際協力フェスティバルや、ちば地球市民のつどい「地球のステージ」に参加することができました。これもひとえに会員各位の絶大なご協力とJICA東京の強力なご支援があつたからであります。

今後、会員相互の親睦の輪を広げながら、地域社会や学校教育の場に深く影響力を及ぼせるような活動を地道に進めて行きたいと考えております。

今回、念願の「会報」を発刊することができました。これも快く寄稿に応じてくださった会員各位ほかのご協力の賜物であります。この「会報」が今後、私たちの親睦の象徴として発展することを祈念するものであります。

最後になりましたが、当会の発足準備から今日まで、事務局の役割を果たしてくださりました千葉県駐在でJICA国際協力推進員の塩沢かおりさんが三月末に退任されます。この紙面を借りて、心から感謝の意を表する次第であります。

浦安市国際交流・協力 フェスティバルに参加

日時 平成十六年一月十八日(日)

午前十時～午後八時

会場 ショッピングプラザ新浦安

一階広場

参加内容

出展：JICAシニアボランティア



国際協力クイズに挑戦

アの活動紹介・応募相談・資料配布・解説パネル展示。国際協力クイズ
ステージ：JICAと千葉シニアボランティアの会の活動紹介など。
担当 当会の会員九名
このフェスティバルの実施は、実行委員会方式で今年は七回目の開催です。参加は浦安の市民団体が中心で、今回は十二団体が参加しました。

シニアボランティアの出展ブースでは、応募相談や活動質問に三十六人が訪れ、説明を聞いたり資料をもちかえられました。やはり先輩者が多く、「七十才台だともう

ダメなの？」とがっかりした方々もおられました。

国際協力クイズは好評で、百八名が挑戦して多くの人が二問正解ですてきな景品を手になされた。「もう一回やらせて！」という人もいましたし、外国人には英訳して解答してもらいました。クイズは五十問中から二問を無作為に抽出し○×で答えるものです。例えば、次の問いは○か×か？

●世界の現在の人口は約六十億



当会のブース

人である。

●イギリスの通貨はユーロである。

●メキシコで話されている言葉は、スペイン語である。

●ジンバブエ共和国は南米にある。

●JICAの理事長は緒方貞子さんである。

●マヤ文明は紀元前に栄えた。

●ステージでは、国際協力推進員の塩沢さんと及川会長とが、JICAとシニアボランティアについて熱弁をふるいました。

●また塩沢さんは「千葉つ子合唱団」のリーダーとして、ジンバブエの唄などですばらしい感動的なハーモニーを広場にひびかせてくれました。

●他の参加諸団体の出展やステージも極めて多彩で、ユニークな活動紹介や展示そして外国民芸品等の販売もありました。

●このフェスティバルは、国際交流・国際協力をより多くのの人々にアピールし、その発展を活かしていくとするもので、多くの人々の関心を集めているようでした。

平成十六年度
定期総会のお知らせ

日時 平成十六年五月二十九日(土)

午前十時～十二時

会場 ばるるプラザ千葉(風の間)

地域社会における JICAのSV・OBの役割

JICA東京国際センター 次長
兼 地域連携業務室長

吉田 丘

「千葉県シニアボランティアの会」が発足して早六ヶ月が過ぎました。他の地域では「SV経験を活かす会」も発足し、帰国されたシニアボランティアの方々がお元気に本邦での活動を開始されており、JICAも、昨年十月一日

付をもちまして国際協力事業団から独立行政法人国際協力機構に生まれ変わりました。また、私共は、JICAの新しい顔として元国連難民高等弁務官であった緒方理事長を迎え、国民の皆様方に分かり易いJICA、どなたでも国際協力に参加できるJICAを目指し、現在組織改革や業務改革に精力的に取り組んでおります。

独立行政法人化の四つの柱の中に市民参加事業の推進がありますが、まさにボランティア事業は、市民参加事業の中心に位置し、皆様方のシニアボランティア活動もその一つとして広く知られてい

るところで、海外でのボランティア活動そのものの重要性は言うまでもありませんが、現地での活動や草の根の人々の様子について、広く地域の方々にお知らせし、今、世界がどのようなになっているのかといったことも含め、皆様方の貴重な経験を地域社会の方々と共有することは、大変有意義であると確信いたします。

現在、JICA東京の地域連携業務室は、広く地方自治体や地域の方々との協力をして、草の根技術協力事業、開発教育支援事業、青年招へい事業、市民参加協力推進事業を実施しております。これらの事業は皆様方のご協力やご支援を得て初めて成立いたします。これまで、JICAやJICA事業について、一般の市民の方々には分かり難いことも多く、必ずしもJICAが地域の方々にとりまして身近な存在にはない難しい面もありました。地域にいらつしやるJICAのサポーター、すなわち皆様方のようなシニアボランティア経験者の存在は、私共

にとりまして、また、これまでに何かやりたくてもどこから手をつければ良いのか分からなかった方々にとりまして、大変に貴重な存在です。開発途上国の現場をよくご存知であること、開発途上国に長く住み異文化を体験されたこと、しかもそれはある程度人生経験を積んでいらつしやうからのものであることから、皆様方は、私共JICAと地域社会を結びつ

ネパールでの経験

『ネパール家族計画協会』

岡本 美佐子（印旛郡栄町）



ネパール国内ではパイオニア的存在のNGOネパール家族計画協会に「母子保健・家族計画人口問題」で派遣された。この協会はEC、USAID、国際家族計画協会などの支援により、近隣アジア諸国と、同時進行の形で政府機関をもリードすべく活躍中である。日本も一九七九年以来、戦後の母

ける非常に貴重な役割を担うことの出来るキーパーソンなのです。ボランティア（Volunteer）という言葉の語源は火山（Volcano）から来ているそうですが、皆様方の内からあふれる熱い思いを海外の活動現場のみならず本邦での地域社会の皆様方に少しでも還元していただきたく、今後とも宜しくお願い申し上げます。

中央局に派遣された。赴任二ヶ月後の国王一族殺害事件以来、交通ストップ、停電、爆発殺傷事件多発など、政情不安、経済困窮が加速して治安が極端に悪化したネパール。「今日も生きられてよかった」と一日一生の思いの毎日だった。そんな中でもチベット仏教ヒンズー教などの歴史的祭りや、古来の慣習をかたくなに守りながら豊かで雄大な大自然のもとで、寄り添い、助けあいながら、明るく笑顔で懸命に日々一生を送っている集合家族の姿に感動した。家族団らんを忘れかけている日本人には、教えられることが多かった。政府奨励の一男一女制。永久避妊手術をすれば二五NS（約二百円）支給される。秋の収穫祭にはそのお金で家族に肉を食べさせようと、手術件数が激増する。痛々しいまでの女性たちの精神に胸をうたれることが多かった。

子保健・公衆衛生問題で大成功を成し遂げた日本家族計画協会による支援を開始した。家族計画・母子保健に加え、寄生虫予防にも力を入れた結果、現在も協会の経営収益に大きく貢献している。故王妃やプリンセスも名を連ねられ、現在三十四支部（全国）にまで発展し、地方支部に助産婦・保健婦・村落開発普及員など協力隊員も継続派遣中で、苛酷な環境の中、皆さん大活躍中である。活動内容が従来の助産介助や避妊方法に加え、女性の自立支援、権利主張、青少年思春期教育、性感染症・AIDS予防運動など、より教育重点に移行する時期に

仕事の内容を列記すると、受付カルテの保管・管理、手術室救急対応器具の調達管理、最低限必要な薬常備の薬局開設。母子手帳改良版のネパール語と英語版計四千部出版、地方無医村での妊産婦婦人健診と婦人組織づくり、

独居老人健診など。日本のライオンズクラブから無公害の電気自動車や女性ドライバーの起用という形で、キャンペーン用に贈呈してもらった。現地の若いボランティアたちと地域毎の問題点を題材にしたストーリードラマを七カ所で実演し、TVで放映されるなど大好評を博した。

任期終了時、挨拶に伺った教育省大臣に仕事の内容を聞かれ、「多くのことを学ばせてもらった」と答えた。

「あなたは本当にネパール社会にとけこめたのですね」の言葉をいただいた。

まず二つの耳と二つの目でよく見聞し、共に考え、今ある環境で、最大限に可能なことを見つけ、アクションする。共に泣き、苦しみ、努力し、小さなことを一つでも実現できた時の感動。国籍、年齢、性別、宗教の違いを越えて、人間同士の支えあいを実感することが国際ボランティアのダイゴ味であることを実感した。何かその国にしてあげようなどと力まず、言葉は出来なくても、目くばせ、身振りで友達になれる。「明るい挨拶と笑顔と握手や抱擁を全員に」をモツ

トリーに、相手の立場に立つて、日本人としての自分らしさを如何に最大限に発揮、表現出来るか、を考えつづける旅だった。

その旅は楽しく、汗のあとの感動がまた次の希望につながるものだった。「何が出来るか、何かしてあげたい」と思えば相手側より、教えられることが多く、その情報収集の宝からよい知恵や自分らしいやさしさを最大限にひきだす。「人のためにどれだけ尽せるか」がボランティアのみならず、人生の生きがいでもあるように思う。

シリアで学んだこと

久保田 譲（八街市）



平成十四年四月から一年間シニアボランティアとして、シリアへ派遣され、シリアの人々と食品工場での教育・改善支援活動を通して多くのことを学びました。

出発前の研修で、海外ボランティアの意義・役割について、

JICA本部の皆様方始め、多くの諸先輩の方々から貴重なアドバイスをいただきました。基本は相互の友好関係を構築することであり、まず相手側の意向をよく理解しながら一緒に行動することが一番大切であるということが、実際に活動に入ってみてよく分かりました。とにかく現場主義に徹することが肝要です。

草の根親善大使の一人として、シリアへ行つてまず感じたことは、双方ともいかにその国のことを知らないかということでした。宗教、生活、習慣、文化いずれも違いが大き過ぎます。シリアと日本は、私たちにとって、あまりに遠過ぎました。これからも、そういう前提でコミュニケーションしていかないとなかなか意見の疎通がはかれないでしょう。ただ、初対面のシリア人とは、「マルババー、こんにちは！」という挨拶から始めるのがよかったです。まずお互いが打ち解けることによって、徐々に信頼関係が構築されました。アラビア語を駆使することは困難ですし、イスラムの教えの根本である「コーラン」を理解するのはなお骨の折れることです。それと大事なことは、できるだけ早く生

活の基盤をつくること、あせることは禁物ですが、よく吟味をしながら、なるべく早いうちに、住居を決めることが大切です。JICA事務所に歩いて行けるところが一番です。ホテルは全て最小限の条件は揃っておりませんが、一年以上も現地で生活する場合には、アパートの方が良いでしょう。防犯セキュリティを考え、一軒家は止めた方がよいでしょう。

シリア人は、簡単に約束はするが時間を守らないというのが普通であるということが、だんだんと分かってきました。大家との打ち合わせなども、明日（ブクラという）から、明後日（バーデンブクラ）になり、一週間後になることもしばしばありました。別に悪気はないように思えますが、それなりに理由を考えられ、最後はアラアの神様が登場する。それにいちいち腹を立てない忍耐強さが要求され、そこを我慢できないと先へは進まないことが多かったようです。辛抱強く付き合うことが仕事を円滑に進めるコツです。もし、日本式の分刻みでないと気の済まない方は、志願を考え直された方が良いでしょう。次にシリア人は、科

学については、欧米・日本よりも先人であるとの自負があり、かなりプライドが高く、生産情報に関し、書類として書いたものではなくてもほとんどのことは解っているとの振る舞いでした。私を含めて日本人は、自分で調査する前に、資料やデータを相手側に要求する。相手は、なぜそれが必要かを逆に尋ねてくる。その点を議論していると一向に仕事が進まない。それに、こちらが必要とするものは、ほとんどいい位作っていない場合が多いので、一から一緒に作っていくつもりで、始める方が良く感じました。それから、訪問した食品工場二十二社について、工場現場のデジタル写真撮影については、七〇%の訪問先で、事前の了承に成功した。事前に、定点撮影による改善効果の実証のための必要性を説き、最高責任者の同意を得るという名案を考え、熱弁をふるったのが効を奏した理由であります。だんだん仲良くなると全く異なる発想で、いろいろと工夫されてきた様子が分かってきて、楽しく共同作業を行なうことが出来ました。ここに誌上をお借りして、JICA現地職員の皆様やカウ

ンターパートの関係者にお礼申し上げたいと存じます。何事によらず、楽しく進めることが肝心でありましょう。

また、初めて対象の工場を訪問した時の対応が、日本とは、全く異なります。立派な応接室付きの社長室が工場長室に通される。そこには大概取引先か従業員か分りにくい人たちが数人おられ、お茶を飲みながら、大きな声で話し合っている。一見して、雑談のようだが、アラビア語のため大方分からないことが多かった。メモなど一切とらず、真剣に討議している。そのうち飲み物は何かよいか聞かれる。「チャープリーズ、ビドゥーンシカル(砂糖抜きで)」と伝える。小型のグラスに濃い目の紅茶のサービスがある。断らないと四〜五回は注ぎ足してくれる。大変親切である。このような状態が一〜二時間続き、午前十一時頃にパン、チーズと例の紅茶を主体にした朝食が供されることが多かった。彼等は、自宅で朝食をとらずに出社し、昼近くに最初の食事をするようでした。ゆつくりとした食事の後、見学や調査等の目的を問われ、工場を一巡するのが常であった。説明よりも

見てもらう方が先なのは、ありがたかった。応接室には、応接セットのみで、打ち合わせテーブルやボード、OHP的なものはほとんどないので、質疑応答も大概筆談を交えての口頭が主であった。日本人ももつと、考え方をフレキシブルにしないといけないと思った次第です。行き帰りの途中、路上で知人に出ると、車を脇に寄せて、最短でも二三分は対話をする。時候接

メキシコ(人)Ⅱ

「孤独の迷宮」

岡本 栄一郎(柏市)



暮らしが長くなるほど、ものが少しづつ見えてくる。風俗習慣や人々の感情が肌になじんでくる。好悪は別にして彼らの考え方が心のひだに入ってくる。そしてその国の風土・厚い歴史の重みがじんわりとわかり始める。

私の場合は仕事の上と共に、日々の衣食住の生活・近隣やサークル活動でのつきあいが、現地理解に

拶と近況が主なものであり、習慣の違いを感じました。それと、関係先へのアポイントはおおむね車の中から携帯電話で行なうことがしばしばの様子で、驚かされました。交通ルールもあるようですが、多くの場合、お互いの暗黙の了解があり、路上駐車、無理と思える割り込み、スピードの出し過ぎの多い割には、交通事故は比較的少ないようでした。

大きな影響を与えてくれた。

長い触れあいの中では本音が出てくる。思わずオヤツと思うこと、ナルホドと納得すること、ドーシテ?と戸惑うことが続く。

そこでオクタビオ・パスの「孤独の迷宮」が登場する。彼はメキシコのアイデンティティを追求し、探求から解放をめざしたノーベル賞作家。

例えば、約束が簡単に破られる、嘘や欺瞞がごく自然に流れていく、或は諦めがいと容易になされる。それらに憤慨したり嫌になったりした後でパスの言葉が顔を出す。

「閉鎖性は我らの猜疑心と不信感の一つの手段である」「嘘は自分を守る本能的な反応であり日々の糧である。ささやかな抵抗・我々

の嘘は豊かだ」この根源は、長い長い植民地時代における苦しい民衆の状況であろう。

「メキシコ人は偽装において優れている。反論せず不平を言わず微笑する。口の中なら反逆の言葉も聞かえない」「我々のすべてが、諦め辛棒し耐えうる者になろうと努める」

メキシコ人はとても陽気でお祭り好き、情熱的・楽天的・快楽主義、そして親切で明るいと言われている。でも深くつきあう中で虚無的・悲しい陽気さやコントラストの高波を垣間見る。

パスが語るように、メキシコ人の感性と想像力の中にコルテスとマリンチエが奇妙に残存しているのだらう。内なる葛藤や心の内奥の矛盾はインディオの血と欧米人の血のせめぎあいではないのか。

「しかしメキシコ人はインディオにもスペイン人にもなりたくない。植民的伝統・継続は否定し訣別する」「そこに孤児としての感情が生まれ行動の背景には劣等感よりも、広く深いところに孤独が横たわる。そこから我々は本当に生き始めるのだ」

自分たちは誰で何者でそして何

であるかを問い続けるメキシコ人たち。

翻って私たち日本人のアイデンティティは?この国際社会・地球家族の中で、どのように生きていくべきなのか?

ヨルダンでのシニア海外ボランティア活動の思い出

中川 安隆(浦安市)



私は一九九七年十月から二〇〇〇年四月まで、シニア海外ボランティア(業務調整)としてヨルダンで活動させて頂きました。これは、中東地区在住十二年半での仕上げとも言える活動でした。「業務調整」はJICA事務所を置き、シニア海外ボランティア(以下SVと略称)に対する後方支援と、派遣先の要請開拓が主な役割でした。後方支援とは、派遣されたSVがその持てる能力を最大限に発揮して頂く為に、事務所側からどのように支援させて頂い

たらよいかを常に念頭に於いて情報サービスや総務・経理業務等のお手伝いをさせて頂く事でした。要請開拓は、派遣希望の要請元と詳細に討議し、SVの派遣がその国の発展にどのように寄与できるか、また、日本とその国との間でのような良い効果が期待できるか等の観点から検討を重ね、要請書類として処理する事でした。

私は、以前に民間会社の駐在員として、ヨルダンに四年半勤めた事があり、何時もそれと比較したくなります。日本政府・JICAの支援による「公用旅券を所持してのSV活動」が如何に有難いかも身に沁みて分りました。日本の運転免許証からヨルダンの運転免許証に切り替える時は、民間の場合には実技試験もありましたが、SVの時は全てが免除でしたし、一方、身の回り品を日本から持ち込む時も、民間の時には厳しい通関検査があり高額の輸入税を徴収されましたが、SVの時は全て免除でした。このように、派遣国は、SVに出来る限りの便宜を与えて呉れました。我々も、日々の活動に加え、長期的展望に立って草の根ベースで少しでも両国間の親

善に役立つよう尽力した積りで、大使も、帰国報告のSVには、多忙の中、長い時間を割いてじっくりと報告を聞いて下さったし、その労をねぎらって下さいました。

趣味の点でも、ヨルダンはとても魅力のある土地でした。世界でも低い死海やその周辺の温泉に入ったり、ごろごろと落ちていくアンモナイト等の化石を採集したり、全土の八〇%を覆う燐鉱石の埋蔵や、石油への転換が将来期待されるオイル・シエールの豊富な埋蔵等を調べたりして、余暇を利用した結構楽しい活動をさせて頂きました。関係者を化石採集や山奥の温泉に案内させて頂いたり、更に、日本人会へのSV報告会でもその成果報告をさせて頂いたりしました。

民間会社時代の駐在員生活とは全く異なる活動領域のボランティア活動をさせて頂いた事は、新しい世界が開け、自分にとって得がたい体験であっただけでなく、誠に意義深いものだったと思います。SV活動は、アメリカのPeace Corpsのそれとよく比較されますが、彼らの英語力に対し、SVは一般にその技

術力と経験が素晴らしいと現地で高い評判を頂きました。この確立した良い評判をSVは今後も是非持続したいものです。更に、帰国後、外務大臣からSV活動に対して感謝状を頂戴した事は、大変光栄でした。

ご恩返しの中の第二の人生 JICAのシニア海外 ボランティア事業を通じて

上田 義晴(千葉市)



人生を第一の人生と第二の人生に分けるなら、小生の第二の人生は、幼少時の北京五年、現役(貿易商社)時代の二十二年合わせて二十七年が海外生活だったわけですが(その大半が、東南アジア駐在)、駐在地では、常にその国/土地にお世話になっているという感謝の気持ちを持っていました。そして、いつかチャンスがあれば、その国/土地に、ご恩返しがしたいと常に考えていました。

折しも、現役引退後の九七年にシニア海外ボランティア(SV)に登録していたJICAから、JICAタイ事務所での業務調整員としての公募案内を受け、タイであれば、八六年初め〜九二年半ばまで五年半、駐在していた関係上、土地勘もあり、タイ語も日常会話程度なら支障ありませんので、SVの要請開拓やお世話をすることは、可能と考え応募しました。幸いにも選考・派遣されたのが、第二の人生の始まりでした。

JICAタイ事務所には、SVの第一号として、派遣されたわけですが、タイ政府各省庁に、積極的に働きかけ要請開拓を行った結果、SVの人数も漸増し、三年後の二〇〇〇年十一月の帰国時には当初、ゼロからのスタートであったものが、五〇名体制にまで拡充出来ましたお陰で、業務調整員も三名体制となり、若干なりともタイ国に対し、ご恩返しが出来たことを嬉しく思っております。

その後続いて、JICAラオス事務所でのボランティア調整員として派遣要請を受けたわけですが、ラオスも、タイの現役時代に、何度かビエンチャンに出張し、日本

とラオスの合併企業第一号設立に関与した国で、タイ語でも通用することもあるとあって、そのご恩返しの意味も込めて、二〇〇一年八月〜二〇〇三年八月末まで、主としてSVのお世話をしました。ラオスのDIC(ボランティア受入窓口)やSV配属先からもSV派遣に対し高い評価を得ましたので、ラオスについても、それなりのご恩返しが出来、永年の小生の夢実現に一役買ってくれたことになりました。

JICAで、お世話になったこの五年間は、小生の第二の人生の夢実現と生き甲斐になったわけで、小生自身もJICAのSV事業に共鳴し、事業そのものの円滑な育成、発展、拡充に向け全力投球してきたつもりでしたが、小生がタイ国でのSV第一号として派遣された頃は、年間を通じてのSV派遣人数が、全世界に五〇名程度だったことを思うと隔世の感があります。(現在は、その一〇倍にもなる年間五〇〇名体制に拡充されてきておりますが、派遣SVの中には、種々のSVが混在してきていることも事実で、一部には、SVの質的向上が叫ばれています。)

タイ、ラオス両国での業務調整員活動を展開していく上で、一番嬉しかったことは、各国政府省庁傘下のSV派遣要請先の要請に見合ったSVが、派遣されてきて配属先が、そのSVの活動を高く評価してくれた時、またSV本人が配属先の職場環境や人間関係（コミュニケーション）に順応し、SV活動を通じて派遣されてきて本当に良かったとの満足感を表

夢の国パラグアイ

福島 章介（松戸市）



南米中央に位置するパラグアイ国の首都はアスンシオン市です。私は、ここにあるカルロス・アントニオ・ロペス職業訓練校「配管科」に二年間（一九八八～二〇〇〇）行っておりしました。

二〇〇〇年に千葉県から二十名程の人がアスンシオンに来訪されたことがあります。実はアスンシオンと千葉市は「姉妹都市」で以前からいろいろと交流があっ

明された時には、正しく需要と供給のマッチメーカーである調整員冥利に尽きると言えます。

今後は、可能な範囲で、JICAのSV事業の側面支援活動の場があれば、活用頂ければと願っておりますが、地元千葉での国際協力活動に何らかの形で関与することにより、今度は、地域住民として千葉へのご恩返しを行っていきたく念じております。

たようですが、たまたまサッカーの世界大会が日韓合同で開かれるのに合せて、パラグアイのサッカーチームを千葉市に招こうという事前活動であったようです。私もその人達に会い同じ千葉県在住で大変なつかしく思いました。

ふり返って、パラグアイの事を思い出してみると、この国の自然環境が「サッカーと似ているナ」と思います。とにかく気象が激しいのです。雨がシトシト降るのではなく、ガーンザッと、あわせてすごい雷鳴、カーッと光る稲妻、窓が吹き飛んでしまうのではないかとと思われる強風、この「トルメンタ」の激しさと「パラグアイ・サカー・チーム」の激しさとに共通点を感じており

ます。強豪「ブラジル」を破り、アテネ・オリンピックに出場すると最近の新聞で知り「さもありなん」と思っています。

夏になれば気温は四〇度近くの酷暑です。日差しが強く数百メートル歩くのがヤツトという感じ

す。また、これらの気象条件は農業にとつて大変です。畑を耕せば土は流されますし、日照が強すぎれば野菜は枯れてしまいます。日系の移住者の多くは農業に携わっておりますが研究に研究を重ねてパラグアイの地に適した農業を進めております。

パラグアイ国の面積は日本の二・二倍で四十万平方キロ、人口は五〇〇～六〇〇万人で、千葉県の人口と同じです。

国土の半分は半砂漠化している「チャコ地域」です。野生動物の宝庫といわれております。この地域の地下水は塩分の多い水なのです。太古の時代、海底が盛りあがってできた大陸だからです。この地域は「淡水」があれば大発展できるところなのです。

水量豊富な大河は国境を流れています。パラナ河パラグアイ河で

す。世界二位を争う水力発電所があります。ブラジルと共同開発したイタイ・イプ水力発電所（発電量の九〇％はブラジルに）またアルゼンチンと共同で作ったヤシレタ水力発電所（九九％の電力はアルゼンチンに）など。

国境には豊富な水資源があるにもかかわらず、国内に降った雨

生涯の最高の思い出 JICAシニア海外ボランティアのタイ農村2年間

宮崎 泰（浦安市）



農林省農地局に十年、その後の国際農業コンサルタントとして三十五年間の途上国技術援助（タイ国の一五年を含む）の最後の締め括りとして、JICAシニア海外ボランティア（SV）に応募して、タイ国東北部コンケン市近傍の約四十五年前に基幹施設の建設完了したノンワイ灌漑プロジェクト（タイ

はすぐに流出、または蒸発してしまい、有効に利用されていません。二〇世紀は工業力・軍事力の時代でしたが、その面ではパラグアイ国はおくれてしまいました。二一世紀には「キッカケ」を見つけ出し「地球に残るパラダイス」あるいは「環境大国」として大発展するはず

です。国最大の四万ヘクタールの近代化に関するサービス業務に従事した。現役時代の業務は農業・農村に関する政策提言から灌漑排水・農村開発プロジェクトの立案・計画作成の上流側にあつたが、最後の業務として最下流側の現在運用中の上記のプロジェクト（受益農民を完全に阻害して国のトップダウン方式で建設され、二十二年間に及ぶ世界銀行、アジア開発銀行、ドイツ政府のODAの援助を受けた）の①維持管理の内容分析と②是正方法（ハード：水管理）、③灌漑システム、④と言う農村地域資源管理の主体形成の在り方（受益農民がボトムアップ的態度で、より活発な自治・協調的態度の醸成支援を念頭に置いた「ソフト」社会開発計画）を大きな二大課題と

して進めた。

全体としてサービス項目は十二に及んだが、「水管理」面でのハイライトは乾季稲作の水田用水量・水管理調査で、七十地点で農民による観測を行った。結果として、灌漑用水の過剰給水と排水概念の欠如など多くの問題点が浮上してその改善案を提言したが、この改善が実施されれば節水効果と共に現在の過少な単位収量の増加が実現可能となる。又、「ソフト」面のコア課題は「水管理を強化するための農民の参加型戦略」で、コンケン大学と協調して半構造的インタビュ方式を立案し、受益農民の意識改革の強化手段として着手した。最終目的は受益農民による水利運営組織・組合の設立で、それまでには十年単位の年月が必要と考えられるが、それに向かつての手法・手順が確立されたと自負している。SV自身の総括として、上記のサービス業務は人生最後の大事な仕事として、カウンセラー・パート機関の可能な協力を得て遂行できたことは個人として多少の不満もあつたが、悔いの残らないものであつた。又、過去にお世話になった王室灌漑局へのご恩

返しもできたのではないかと思っている。

SVに応募したもう一つの理由は、タイの農村で老妻と二人で日本では実現しそうにもない贅沢でスローな田園生活を楽しみ、現地の人々と深く付き合うことで文化を共有しようとすることにあつた。幸いにも安全性の高い庭付き一軒家(敷地二五〇坪、建坪五〇坪)をコンケン市郊外に借りて、多くの熱帯性の樹木、花木、果樹、ラッパに囲まれて三季(涼季、暑季、雨季)を毎日中国暦(太陰暦)で確認しつつ、広大な芝庭に有機農業畑を設けて野菜、草花を栽培した。妻同伴が職場、近所の人たちとの付き合いを促進し、又孤児院、社会福祉施設でのボランティア活動にも精力的に参加した。

二年間の活動最後に、近所、親交のあつた人々約三十人を自宅に招いて、感謝のガーデン夕食パーティ(タイ料理六〇%・日本料理四〇%)を開催し、又数度に及ぶサヨナラパーティも開かれて、後ろ髪を引かれる思いで帰国の途に着いた。帰国して一年有余、特に冬の季節にはコンケンにおける熱帯氣候がしばしば思い出されて懐かし

く振り返っています。そして、本年の十一月十二月にアフター・サービスを兼ね現地を訪問して旧交を温めたいという計画を持っており、それを楽しみにしている毎日です。

メキシコ多文化社会での生活体験

寺戸康隆(松戸市)



私はJICAシニアボランティアとして二〇一一年四月から二年間メキシコ合衆国バハ・カリフォルニア州エンセナダ市にある同州立自治大学エンセナダ校工学部土木工学科に所属し、主に地下水開発のための応用地質学的活動に従事しました。専門と所属の違う他の三名のボランティアと同時に赴任しましたが、同大学へのJICAからの派遣は初めてとあつて、当初は受入れ機関との対応に苦労があつたのは私だけではなかったようです。メキシコは北米大陸に位置し、人口は一億人、面積は日本の五倍以上ですが、メキシコシティ中

心地はアメリカ国境からわずか一〇キロ南の太平洋岸にあり、半砂漠地帯にありながら気候は温和なため、国内の他地域はもとよりアメリカ、日本、イギリス、ロシア、スペイン、ドイツ、フランス、イタリア、トルコなど世界十数カ国・地域からの移民が定住し、国際色豊かな多文化社会を形成しています。ここでの体験で得られた最大の収穫は多文化社会の様々の人々と普段のコミュニケーションが保たれたこと、異文化についての理解を分かち合えたことおよび世界における日本の現実を直視でき、グローバル化への自覚が呼び起こされたことと言つてよいでしょう。ここでは日本とメキシコの慣習、文化あるいは行動パターンの違いについていくつかを紹介したいと思います。メキシコは人と人とのあいさつ・触れ合い・スキンシップを非常に大切にしています。これに関して性や年齢の違いはほとんどありません。反対に我々日本人はこの面でギクシャクし過ぎるのが残念です。特にほほ笑ましかつたのは老若男女に関係なく同等に付き合ってくれることです。例えば、若い女性が中高年の男性に対しても同年代と変わ

らぬ態度で二人称で対話してくれることです。一方、相手に「要求する」することを嫌がります。日本ではそれほど気にしない意思表示が相手を結果的に傷つけることがあります。人に頼むときには相手の尊厳を傷つけないよう、ことばの表現法に注意する必要があります。メキシコでは約束がなかなか果されなく、「アスタ・マニャーナ(あしたまた)」と言われて、先延ばしされることがしばしばあります。このような場合はしつこく実行を求め、気長に待つことが肝要です。しかし、私はこのことには「今はたとえ都合が悪くても、あしたには希望がある」という願望も含まれているように思えます。メキシコでは祭りやイベントのときは必ずと言ってよいほど、国旗の掲揚と国歌の斉唱が行われます。アメリカと同様、多民族・多文化国家では団結を維持するため、日常生活の中でも絶えず愛国心が培われているわけです。この点では日本は世界からかけ離れた感

ボランティア

家族連絡会

日時

平成十五年九月二十七日(土)

会場

プラザ菜の花(千葉県庁前)

参加者

ボランティア家族五十三人

来賓主催六人

OB・OG二十八人(内シニア九人)

これは当会とJICA協力隊OB会の共催で行われた行事です。家族の方々の自己紹介では、派遣者を気づかう思いが溢れていました。

OB・OGはそれぞれの体験を語り、代表者はスライドを使って任国事情を紹介しました。

歓談では国別にわかれて、八卓の大きな丸テーブルを囲みました。(まるで結婚披露宴のムード)家族の方々とOB・OGが、個々にあるいはグループでお互いにじっくりとそしてなごやかに情報交換をしました。

最後の全体の質疑応答では、次の項目が話題になりました。現地の治安・帰国後サポート・現地での健康や病気・荷物の運賃や関税・現地の訪問など。

OG・OBや来賓主催の皆さんの話は、家族の方々にいろいろと参考になったようです。

新シニアとの懇談会

日時

平成十五年十月十日(金)

平成十五年十一月七日(金)

いづれも午後一時半～三時

場所

千葉県庁本庁舎

出席者

新シニア

OB・OG

十月六名 十一月四名

この懇談会は、新シニアの千葉県庁表敬訪問後に、総合企画課の会議室と喫茶店で行われました。

赴任直前の時期なので、主として各地の生活・安全・気候などかなり具体的に細かいことが話題になりました。

OB・OGの諸体験や激励は、新シニアの方々に役立ったでしょうか。



第一回定例会

平成十五年十二月六日(土)午後二時

場所 ばるるプラザ千葉

出席者 二十五名の会員を含む

総勢四十名

①講演会Ⅰ

演題 「新しいJICAとボランティア事業の今後」

講師

独立行政法人 国際協力機構(JICA)

東京国際センター(JICA東京)

次長 吉田 丘氏

各々が地球市民の一員との認識を持つことと十月一日からの独立行政法人化に伴うJICAの変容を説明。

②講演会Ⅱ

演題 「千葉県の国際化政策と当会への期待」

講師 千葉県総合企画部総合計画課 国際化推進室

副主幹 西織 哲大氏

国際行政の重要な仕事である外国人の受入れを過去十数回繰り返してきたが、今後は順次、県主導から民間主導に移行していく。背景に県の財政削減があるが、一方、県民意識が進化し次第に明るい展望が期待出来るようになった。ボランティア経験者の活動を期待する。

③今秋帰国者の紹介

八名の帰国者が紹介されました。

④懇談会

ケーキ、コーヒーで和やかに歓談

午後四時半に散会しました。

心からありがとう。塩沢さん どうぞよろしく。大山さん

塩沢さんには、発足時から会を支える最も大切な役割を果たしていただきました。どれほど助かったことか。もうただ感謝の気持ちでいっぱいです。この春、より一層の向上をめざして、専門の音楽の世界で再び活躍・挑戦される由。会員一同心から、祝福と応援のエールをおくります。

大山さんは、協力隊ではマラウイで活躍され、今回塩沢さんから引き継いで国際協力推進員として赴任されました。いろいろとお世話になることと思います。どうぞよろしくお願いたします。

塩沢さんの言葉

一年間という短い間でしたが、千葉県JICAシニアボランティアの会を立ち上げ、事務局として活動させていただきました。シニアボランティアの会の役員の方々は、常に穏やかで、感謝の心をいつも持つていらっしゃる素晴らしい方々でした。日本人としての常識など教えられることも多く、沢山のことを学んだ一年間でした。本当にありがとうございました。後任は大山美砂子です(マラウイ 養殖)。よろしくお願いたします。

編集後記

海浜幕張の近代ビル群の雄WBGの十四階で、この会報は産声をあげました。まだまだ拙速未熟ですが、会員の皆様のお力でよりすこやかに育てていきたいと思います。本会の諸活動や広報への要望もぜひお寄せください。

今後の千葉県JICAシニアボランティアの会の発展を心から祈りつつ……。